

鼻腔内異物の一症例

○小笠原 靖, 久芳陽一, 副島嘉男, 本川 渉

福岡歯科大学小児歯科学講座

一般的に、鼻腔内異物は小児に多く、好奇心から人為的に挿入されたもの、あるいは外傷が原因の頻度として高いといわれている。また小児の場合、本人が異物の侵入を訴えないと、長期間、見過ごされる危険もある。

今回、当小児歯科を訪れた患者の診査時に、偶然、鼻腔内異物のケースに遭遇したので報告する。

〔症例〕

患児：7歳5ヵ月、男児

初診日：平成3年10月14日

主訴：上顎右側中切歯の萌出遅延

家族歴：一卵性双生児の兄がいる。

既往歴および現病歴：妊娠出産とも特に異常なし。2歳時、中耳炎にてA耳鼻科を受診。中耳炎は治癒するも、同時期より軽度の鼻炎症状を認めたため、現在までA耳鼻科へ定期的に通院。5歳1ヵ月時、B歯科にて上顎正中部過剰歯を抜歯されており、その後、上顎右側中切歯の萌出が遅延したため、平成3年10月14日、本学小児歯科に来院。同年11月の総合診断時、X線診査にて鼻腔内の異物らしき不透過像が認められた。

全身所見：栄養状態良好で特に異常なし。

口腔内所見：上顎右側中切歯の萌出遅延と上下の正中に軽度のずれを認める他、特記事項なし。

X線所見：鼻中隔左側で下鼻甲介の高さに境界明瞭な1つの不透過像を認めた。またB歯科で撮影された5歳時のデンタルでは、密着した2つの不透過像が観察された。

治療：当日、摘出を試みるも、不可能であったため、C大学病院耳鼻科に依頼。平成4年3月、全身麻酔下にて無事摘出され、異物は金属性磁性体であるビップエレキバンと判明した。

過剰歯による萌出障害と多数の永久歯歯胚欠如が同時に現れた一症例

○塚本末廣 武内哲二 平塚正雄

福岡歯科大学 高齢・障害者歯科学講座

埋伏過剰歯が他の健全な歯およびその周囲組織に種々の影響を与えることはよく知られている。健全な咬合を育成していくには、それらの障害を未然に予防していかなければならない。また、後継永久歯歯胚の先天欠如がある乳歯においては晩期残存となるので、その乳歯の管理は臨床上重要である。今回、我々は同一固体に上顎両側第一大臼歯の萌出障害を来した埋伏過剰歯を有し、さらに多数の永久歯歯胚欠如を認める症例を経験したので報告する。

- 症例 -

患者：8歳11か月、女児

初診：平成4年4月21日

主訴：過剰歯の抜去依頼。

家族歴：問診による範囲では父母、同胞に歯数や形態の異常は認められなかった。

既往歴：特記すべき事項はなかった。

現病歴：近くの歯科でう蝕の治療を受けていたが、埋伏過剰歯と先天欠如歯を指摘され当科に紹介された。

現症：

1. 全身所見：体格は中等度で、栄養状態は良好である。

2. 口腔内所見：混合歯列で、Terminal planeは、左右ともvertical type である。

上顎右側第一大臼歯は未萌出、上顎左側第一大臼歯は一部萌出。

3. X線写真所見：左右上顎第二乳臼歯の遠心に過剰歯が認められた。また、上下左右の第二小臼歯と第二大臼歯の8本に先天欠如が認められた。

4. 処置：笑気吸入鎮静法、局所麻酔下において通法に従い上顎右側埋伏過剰歯を抜歯した。左側は第一大臼歯と癒合していたので開窓した。